道徳ジャーナル

125号

●21世紀　心の時代に
宇宙を通して自分をよく知りたい
久保勇貴……1
●道徳授業　私の実践
・人との出会いに学ぶ道徳の時間
乾　道夫……4
・教師も生徒も楽しめる道徳授業を目指して
～震災三十年の実践を踏まえて～
井上昌代……6
●浅見先生に相談です！
ねらいに向かうためには？
浅見哲也……8
●どうなるこれからの道徳授業……10

21世紀 心の時代に

宇宙を通して自分をよく知りたい

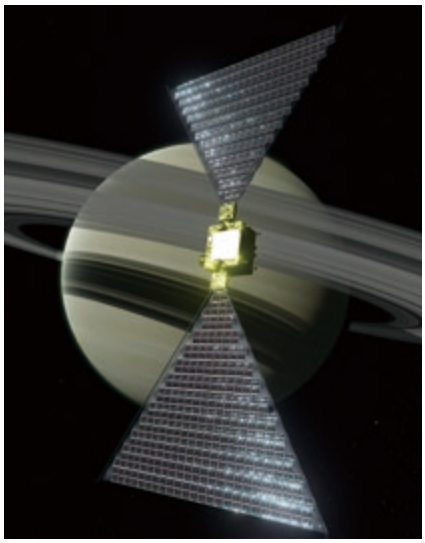
宇宙だって普通の仕事場

僕は今、「宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）」に勤めていて、特に宇宙の謎を解明することを専門とする「宇宙科学研究所」というところで、将来の宇宙探査ミッションを作る仕事をしています。そんな仕事をしています、と言うと、へえーなんだか想像もつかないですね、とよく言われるけれど、やっていることは案外会社員と変わらない部分も多いものです。出勤して、パソコンを開いて、メーカーの人からのメールに返信して、解析したデータを整理して、自分の考えを資料にまとめて、会議でいろいろな人と意見交換して、締め切りまでに書類を完成させる。宇宙はなんだか世間離れしたカッコいい世界、と思われることも多いのですが、日々の仕事は地味で地道なことの積み重ねです。

今は、日本初の土星探査機を作る「ＯＰＥＮＳ（オープンズ）」という宇宙探査プログラム初号機のミッション検討を主に行っています。重さはアメリカやヨーロッパの探査機の十分の一で、世界最小の土星探査機です。将来的にはなるべく高い頻度で繰り返し木星や土星などを探査できる仕組みを作ることを目指しています。

宇宙工学研究者・作家

久保勇貴（くぼゆうき）



超小型外惑星探査プログラムOPENSの初号機

Gakken

僕の担当は「姿勢制御」というもので、宇宙機の向きをいかに上手に制御するかを考えています。特にOPENSの初号機は、極限まで軽くて大きな太陽電池膜を広げているので宇宙機の姿勢が乱されやすく、制御の難易度が高いです。

そんな世界初の試みをいくつも行う野心的なミッションの立ち上げに貢献できていることをうれしく思っています。

国の予算を使った大規模な宇宙探査ミッションは、たくさんの人が、数年から時に十数年もの長い年月をかけて議論し、手を動かし、作り上げられます。

OPENSでも、土星の距離から確実に通信できるアンテナを設計する人、極限まで軽くて頑丈なフレームを設計する人、土星の寒さに耐えられるよう温度管理をする人、土星に行くために必要な加速を得るためのロケットエンジンを設計する人、その全ての機能を限られた質量の中に上手に収める人、そして設計された宇宙機を実際に製作するメーカーの人など、打ち上げが近づけば数百人規模の人が協力してミッションを成功させる必要があります。それだけの人が関わると、当然意見が食い違うこともありますし、理系の研究者どうしでも計算や理論だけでは割り切れない話だって出てきます。自分とは違う意見に根気強く耳を傾け、お互いが納得できるまで諦めずに話し合うのが大事なのは、案外学校生活ともそう変わらないように思います。

なんとなくがずっと続いている

宇宙に興味を持ったきっかけは、実は自分でもあんまり分かっていません。突き詰めれば「なんとなく」以上の理由はなかったと思います。なんとなく幼い頃に宇宙飛行士に憧れて、塾の先生に言われるままなんとなく中学生になってから受験勉強を始め、東京大学の航空宇宙工学科が宇宙飛行士をたくさん輩出しているということを知って、なんとなくそこに行けたらよさそうだと思い、促されるままにたくさん勉強をしました。

周りの友達の中には、「伝記を読んで感動したから研究者になりたい」とか、かっこいい夢を語る人がいたけれど、僕には「これだ！」と自信を持って決められるような夢はありませんでした。学歴・経歴だけ見ると、目指した夢に向かって一直線に進んできたように見られがちなのですが、自分の実感としてはそんなことはありません。何にもなれずに不安なまま、それでも何かにならなきゃいけないと訳も分からず走っているうちに行き着いたのが今の仕事だと思っています。

子どもの頃も、なんなら今だって、僕は臆病です。周りの大人から見放されたら生きていけないから顔色をうかがって、自分の居場所を見つけることに必死で、褒められるため、認められるために勉強を続けていたように思います。たまたま勉強は自分の性にも合っていたから続けられたけれど、自分がやりたくてやっているのかはずっとよく分からないままでした。相手の評価に合わせて自分の感情に蓋をしているうちに、どの蓋を自分で閉めたのかも分からなくなって、次第に自分が何をしたいか、何のために勉強していて、何が好きなのか、自信が持てなくなってしまいました。

書いて開く

ブログを書き始めたのは、大学生になってからでした。長い間感情に被せ続けてきた蓋は、ベタベタのハチミツの瓶みたいに固くなっていて、だから、ゆっくり考えてみることにしたのです。話すよりも、書くことにはずっと長い時間をかけられます。書きながら、本当に自分が感じていることは何なのか、問い続けることができます。何を書きたいと思っているのか、何を美しいと思っているのか、今書いた一文は本当に心の底から思っていることなのか、ひねったりたたいたりしながら固い蓋を開こうとしてみました。その時の僕は、書くことなしには感情を吐き出せませんでした。生きていくために書くことがどうしても必要でした。なんとなく、ではなく、自分の意思で書くことを選んだのでした。

次第に、どうせ書くなら周りの人に面白いと思ってもらえるものを書こうと、自分が研究している宇宙の話も絡めて書くようになりました。それだって、

他人の顔色をうかがう悪い癖が抜けていない証拠でもありますが、周りに面白いと思ってもらえるものを書くことは、自分にとって面白いものが何かを探すことでもありました。それを探すこと自体が、自分の感情の蓋を開けていくことにつながっていました。最近は、本業の宇宙工学研究の傍らで作家としても仕事をしています。僕は今、ようやく自分の意思で選んだ仕事を行えていると思っています。

『ワンルームから宇宙をのぞく』
久保勇貴（太田出版）
定価：1,980円（本体1,800円＋税）
ISBN 978-4-77-831856-7

人生は探査機設計と似ている

こうやって書くとまた、僕のこの話が理想的な成功体験のように聞こえてしまうかもしれません。けれど、決してこれをお手本として真似しようとは思ってほしくないのです。

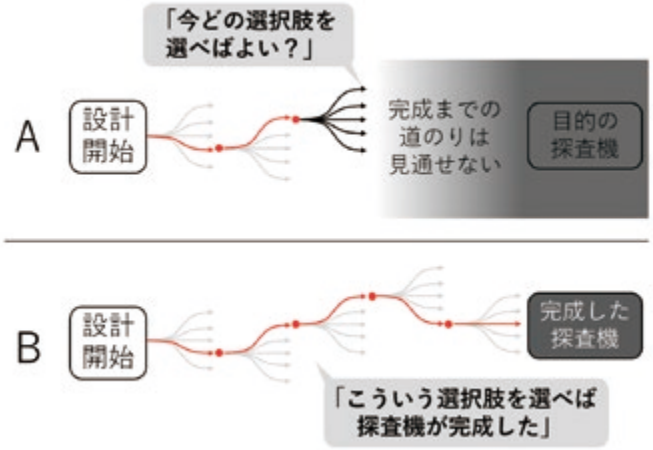
探査機の設計とは、「こういう目的の探査機を完成させるには、それぞれの機器をどう設計すればいいか」（下段図のA）を考えることです。探査機は非常に多くの機器からできていて、その完成までの道のりは複雑すぎて見通せないので、今この瞬間にどの選択肢を選ぶのが最適な道筋なのかは、非常に難しい問題です。それは、「それぞれの機器がこういう設計になっているから、こういう探査機が完成した」（下段図のB）という説明をすることよりもはるかに難しいことです。Bの説明を聞くことはヒントにはなるかもしれませんが、目的も条件も違う別の探査機の設計には直接当てはめられません。

僕の話を含め、大人が語る体験談は、全てBのほうです。「こういうことをやってきたから、こんな大人になりました」という説明をいくら聞いたって、「こういう大人になるには、どう行動すればいいか」という、今まさに児童・生徒の皆さんが直面しているAの人生設計への答えにはなりません。環境も時代も性格も特技も全部違うのだから、たとえ全く同じ選択肢を取ったとしても同じ場所には決してたどり着けません。人生はやっぱり自らが、自らに課せられた条件の中でもがきながら選び取っていくしかないものです。

僕だって、訳も分からず進んでいるうちにこんな大人になっただけなので、偉そうなことは言えません。なんなら今でも何をしたいのか、どう進みたいのか迷い続けています。死ぬまで迷っているかもしれません。だからせめて、研究を通して、書くことを通して、宇宙を通して、考え続けたいと思います。

児童・生徒の皆さんが、もし進む方向に迷ったら、「自分の中の『なんとなく』を信じてごらん」と伝えてみるのもいいかもしれません。理由なく好きなものには、嫌いになる理由だってそう簡単にできないものです。あんなに好きなことを見失った僕にも、子どもの頃なんとなく好きだったものはずっと残っています。人と協調することももちろん大事だけれど、それ以上に、自分の心に正直になることも大事だと思います。自分の心に蓋をせず、どんどん開けていけば、自分でもびっくりするようなものを見つけられるかもしれません。

（くぼ　ゆうき）



道徳授業 私の実践

人との出会いに学ぶ 道徳の時間

鳥取県岩美町立
岩美北小学校教諭
乾　道夫

はじめに

道徳の時間は出会い（出合い）の時間。そんなことを考えながら、日々の道徳授業を実践している。教材の登場人物と出会い、人物の行いや葛藤から考えを伝え合う。そして自分の生き方につなげる。道徳の授業で出会った人、もの、ことから考え、伝え合うことを通して、これからの自分の生き方のモデルを持つことができるのではないだろうか。

担任した一年生の子どもたちは、思ったことをどんどんつぶやく。挙手することを忘れて、思わずつぶやくこともある。「すごい」「きれい」「かっこいい」といった驚き、「えっ」「そんなんしたらいけんで」といった感情。そして、教材を通して出会った人への憧れ。

子どもたちが「こうなりたい」「こうありたい」と考えることのできる道徳の時間を大切にしたい。

授業の概要

○**教材名**　「おかしで　みんなを　しあわせに」（『新版　みんなのどうとく1』学研）

○**主題名**　大すきな　こと

○**内容項目**　希望と勇気、努力と強い意志

○**教材の概要**　子どもの頃から母親とお菓子を作るのが大好きだったえみさんは、自分の作ったクッキーを家族や友達が喜んで食べてくれたことをきっかけに、お菓子を作る仕事がしたいと思うようになった。大きくなると、ケーキ屋さんで働きながら作り方を勉強し、難しいお菓子は何度も作った。「みんなを幸せにするお菓子をずっと作っていきたい。」そう思って自分のお店を始めたえみさんは、お菓子作りの仕事が大好き。小さい頃に、家族や友達が、「おいしい」と言ってくれたことが始まりだったのかもしれない。

授業の実際

【導入】

大人になったら、なりたいものを尋ねた。児童は自分がなりたい職業を発表した。「アイドル、パフェ屋さん、お花屋さん、お店で働く人」など、みんながよく知っている仕事だけでなく、「ユーチューバー、ブイチューバー」といった動画配信の仕事や、「宇宙飛行士、薬剤師、自衛隊員、エンジニア」など、教師が仕事内容の説明を加える必要のある職業も挙げられ、一年生がなりたいものはさまざまであった。

【展開】

教師が教材を範読した上で、三つの発問をした。

発問①このお話を聞いて、感じたことを教えてください。

・よかった。

子どもの頃にほめてもらったことが、夢をかなえることにつながってよかったと感じた。

・頑張ったんだな。

友達や家族がいたから、頑張れたんだと思った。

・すごい。

お菓子作りが上手なこと、子どもの頃からの思いが、大人になっても続いていること、苦労しても「おいしい」と言ってもらうために頑張ったことなど、子どもの感じた「すごい」の理由はさまざまであった。

発問②えみさんは、頑張っているよね。どうして頑張ったんだろう。

・ほめられたから。

ほめられたら力になるのか尋ねると、「なる」と返答した。児童は、受け止めてもらえる、認めてもらえることは、努力を支えるものだと感じていることが分かった。

・パティシエになるため。

夢をかなえるには、努力しなくてはならないと理由を答えていた。

・みんなを幸せにしたいから。

自分が頑張ることで周囲の人を幸せにできることに気付いた児童がいた。

・喜ぶ顔が見たいから。

頑張ることで喜んでくれたら、自分も喜べる。

児童は、えみさんが頑張った理由を伝え合った。子どもたちがそれぞれに考え、伝える様子が見られた。

発問③えみさんのように頑張ったら、どんな自分になれるかな。

・夢をかなえられる。

・賢くなる。

・みんなを幸せにできる。

子どもの頃からの夢をかなえたえみさんを「すごい」と感じた児童は、自分も夢をかなえたいとみんなに伝えた。自分の夢はまだないと言っていた児童は、頑張ることで賢くなれると発言した。

【終末】

「先生は、小学校三年生のときに将来の夢が変わった。夢は変わってもいいと思う。これから『こうなりたい』と決まる人もいると思う。先生は、今も『こうなりたい』という夢がある。」と、話した。

【今日の学び】

授業の終わりに、今日の学びを児童に書かせた。

・えみさんは、とても頑張っているんだと思った。

・みんなを幸せにするために、えみさんは頑張ったんだと思った。

・みんなにも、夢があるのだと気付いた。

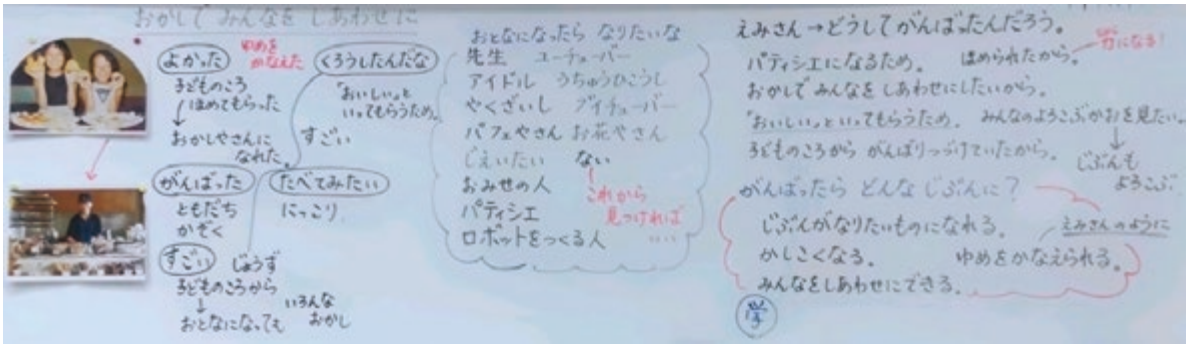
・「絶対なれる」と信じて頑張ればなれるかもしれない。

・自分もみんなを元気にしたい。

おわりに

小学校一年生が将来の夢を決めるためではなく、「こうなりたい」という思いを持って頑張ることはすてきだと感じられるよう、授業実践を考えた。しかし児童は教材を通して、頑張る理由を考え、それが自分だけでなく周囲の人を幸せにできると感じ取り、友達と伝え合った。

自分の頑張りが友達を笑顔にするかもしれない。友達の頑張りを見つけて称賛することで、友達は頑張り続けられるかもしれない。そんなことができる学級を目指していきたいと強く思った。えみさんとの出会いから学んだ時間だった。



（いぬい　みちお）

道徳授業 私の実践

教師も生徒も楽しめる道徳授業を目指して
～震災三十年の実践を踏まえて～

兵庫県神戸市立
湊川中学校主幹教諭
井上昌代

はじめに

「あなたは、道徳の授業が好きですか。」と、問われたら、私は「好き」と答えます。先生方は、いかがでしょうか？

「嫌い」とは言わないまでも、「苦手」という声をよく耳にします。苦手な理由は、例えば、「シーンとしてしまうから」「話が盛り上がらないから」……など。授業の進め方やねらいが分からなくなってしまうという困りごとをよく聞きます。

私が道徳の授業を好きな理由は、生徒と一つの「お題」について話し合える時間だからです。それが「いのち」のときもあれば、「友情」や「思いやり」「家族愛」など、生徒たちの思いや考えを聞き、生徒と共にお互いの考えを深めていく、その瞬間がとても楽しくすてきな時間だと思うからです。道徳が教科化され、教科書を使用するようになってからの時間は確実に流れ、たくさんの実践を行ってきました。教師も生徒も、心待ちにするような授業づくりを日々目指しています。

授業づくりにあたって

1、**生徒の興味を引く導入**

例えば、「家族愛」の授業なら「家族って何色？」と発問し、色彩盤から色を選ばせ、簡単にコメントをさせる。「思いやり」なら、「最近親切にされたことは？　したことは？」と発問し、ふだんの生活の中から話をスタートする、など。

2、**発表をうながす工夫**

全員の意見が可視化できるコメントシートの掲示（もちろんＩＣＴを利用することも可能）。グループで意見をシェアし、グループボードに記入させる。生徒が発表しやすい環境を用意する。

3、**授業のつくり方**

①教材を読む。（読み物として、自分自身がどこに感動したか？　何を考えさせたいのか？　と、自分に問いかけながら読んでいます。）

②２回目は、授業をどう進めるのか考えながら読む。

③生徒たちに考えさせたいこと、学んでほしいことなどが、どの内容項目に当てはまるかを考える。（教材によっては、自分で判断がつかない場合もあり、そのようなときは、指導書を参考にしています。）

④中心発問を考え、その後、中心発問につなげるための補助発問を考える。

⑤この授業に興味を引きつけるための導入を考える。（ここがいちばんのポイントです。）

⑥授業をどのように終えるか考える。（映像を見せる、音楽を流す、教師の経験談を話すなど余韻を残す方法を考えます。）

授業の概要

○**主題名**　①かけがえのない命　②かけがえのない家族
○**内容項目**　①生命の尊さ　②家族愛、家庭生活の充実
○**教材名**　「語りかける目」（兵庫県道徳副読本『心かがやく』兵庫県教育委員会）
○**ねらい**　①限りある生命のかけがえのなさを理解し、自他の生命を尊重しようとする道徳的態度を育成する。
②家族を失う苦しみや悲しみに触れ、そのかけがえのなさを感じ、家族を大切に思う心情を育てる。
＊「かけがえのない命」について授業を進める場合は①のねらいで展開し、「かけがえのない家族」なら②で授業を展開します。どちらでも可能な教材です。

震災から三十年新しい授業展開へ

本教材は、阪神・淡路大震災で母を亡くした少女の話です。少女は、焼け跡で母の遺骨を一人で「なべ」に納めます。その少女から筆者（警察官）が話を聞き、思わず神に祈らずにはいられない心情と、生きていこうと決意する少女の目に思いをはせる教材です。震災直後から、この教材を使い、命の尊さやかけがえのない家族の大切さをテーマに授業を展開してきました。しかし、地震発生から時間が経過するほど、震災未経験者が増え、少女のつらさや悲しさを自分事として考えづらくなり、命って大切だな、家族を大切にしなくては、と他人事として受け取られる授業になっていったと感じていました。

【導入】

一月十七日の学校での震災追悼集会に向けて、ＶＴＲを視聴するなど、被害の状況を事前に確認してから授業に臨む必要がありました。授業の導入で、再度写真を提示しました。

【展開】

範読後すぐ、一人一人にコメントボードを配布し、読後の感想を黒板に掲示しました。すると、やはり、少女がかわいそう、つらい、想像を絶する悲しみであるといったコメントがほとんどになります。その後、震災で亡くなった少女の母やこの少女の聞き取りを行った筆者（警察官）など、実は、震災という実相の中にさまざまな立場の人がいることに気付くように発問を重ねました。母が、火災が近づく中で、にぎった少女の手を放すシーンでは、「生きていてほしい」という発言と「死なないでほしい」という発言が出ました。

命を考えたとき、どちらも命が大切だという意味は変わらないのですが、生徒たちは、このときの母の気持ちとしては、「死なないでほしい」ではないかと一歩踏み込んだ意見を語っていました。また、筆者（警察官）の立場では、少女に対して何も言えないと答えた生徒がほとんどでした。震災で家族を亡くした少女、火災に巻き込まれるなか、何とか少女を助けたいと思っている母、そして、その少女と出会った警察官。もし、震災が起これば、生徒たちがどの立場になるかは分かりません。

【終末】

生徒の一人は、「六四三四名という数字の中にも一人ひとりの生きていた証があって、一言では言い表せない感情があった。それでも生きている人々が、つらい気持ちで立ち止まるのではなく、三十年かけて一から神戸を元の姿に戻そうとしていたのを知って、人は本当に強いものだと思った。」とつづっていました。

教師も生徒も震災未経験者が増える今日、いかに生徒と共に考えていくか今も授業を模索中です。

（いのうえ　まさよ）

浅見先生に相談です！

第3回

ねらいに向かうためには？

子どもたちが出す考えは、常に授業のねらい通りとは限りません。

十文字学園女子大学教授
浅見哲也

マンガ・春原弥生

道徳科の指導が難しくなった！

道徳科の授業の指導は以前よりも難しくなっていると言えます。それは、教科化以前の「道徳の時間」の授業よりも、質的向上を図ろうとしているからこそです。ねらいに向かう道徳科の指導が困難になったのは大変なことですが、それは喜ばしいことでもあるのです。

もちろん、かつての指導を批判しようとしているのではありません。私自身も先輩の思いのこもった授業をたくさん観て、指導技術を学ばせていただきました。しかし、その中には、のちに課題として指摘された、教材（当時は資料）の登場人物の心情理解のみに終始する指導、いわゆる「読み取り道徳」や、望ましいと分かっていることを言わせたり、書かせたりすることに終始する指導、いわゆる「押しつけ道徳」もありました。

これらの指導に欠けている点が、今日の道徳科の学習で重視されている、ねらいとする道徳的価値を一面的に捉えるのではなく多面的・多角的に考えることや、自分との関わりで捉えて考えることであり、今、先生方がこうした授業を行おうとしているところに難しさが生まれているのです。

「読み取り道徳」や「押しつけ道徳」に共通しているものは、子どもが一本のレールに乗って着実に終着駅にたどり着くような授業であり、「読み取り

道徳」では登場人物の気持ちや考えが、「押しつけ道徳」では教師の気持ちや考えが、その終着駅になっています。要するに、どちらも子どもが主体ではないのです。教科化をきっかけとして、このような授業から子ども主体の授業へと、質的転換を図ろうとしているのです。

個別最適な学びと協働的な学び

だからと言って、すべてを子どもたちに任せて授業を行うということではありません。なぜかと言うと、道徳科の授業にはたどり着こうとする「ねらい」があるからです。

道徳科では、ある内容項目に含まれる道徳的価値の理解を基にしながら、道徳性を養うことが求められています。ですから終着駅はあるのです。でも、そこへ向かうレールは一本ではなく複数あり、しかも各駅停車の電車に乗って行くとも限らず、特急で行ったり、ときには寄り道をしながら歩いて行ったりするかもしれません。途中で道に迷う子どもだっています。

こうした子どもたちの気持ちや考えをよく聞き、そのよさを認め、ほかの友達と比べたり、共通点を見つけたりしながら、子ども自らの足で終着駅にたどり着くような授業を目指しているのです。ですから当然難しいわけですよね。これが、道徳科でいう個別最適な学びと協働的な学びの考え方です。

どのようにねらいに向かうのか？

特に難しくなったところが、これまでのように、常に一つの道徳的価値のみを扱って授業をするのではなく、子ども自身の価値観を尊重し、自由に表現できるようにしながら、それを関わり合わせ、徐々にねらいとする道徳的価値に向かって話し合い、その道徳的価値を自分の中に見つけたり、生かそうとしたりしていくことです。果たして、一単位時間の授業で、一人の教師が子どもたち全員を終着駅へと導くことができるのでしょうか。

もう少し具体的に授業場面で考えてみましょう。例えば、途中でどちらがよいのか、価値観が分かれるような教材での指導があります。一方の子どもたちは、教師が何もしなくてもねらいとする道徳的価値のよさや大切さを実感できそうです。この場合、もう一方のそうではない子どもたちへの配慮が必要になります。どのような発問を投げかけて異なる価値観を考える機会を与えれば、その子どもたちはねらいの方向に価値を見いだすのでしょうか。このことは、それまでの自分の価値観を否定するのではなく、自分とは異なる価値観の道徳的価値にも気付くということです。そう簡単なことではありませんが、ここに時間をかけて丁寧に指導することはとても重要です。

また、授業によっては、子どもの考えがねらいに向かってはいるものの、さまざまな内容項目に広がる場合があります。この状態は、全く関係のないことを考えているのではなく、子どもたち一人一人が、自分が大切にしている道徳的価値を基にして考えていると捉えることができます。このようなときには、子どもたちの共通点を見つけたり、ねらいとする道徳的価値とのつながりで捉えたりしていくことができます。子どもたちの実態を踏まえれば、あえて全員の思考を扱わず、一人の思考を取り上げてみんなで話し合うことで、自分では気付かなかったことが見えてくる場合もあります。つまり、その授業によって、その場に応じた終着駅への向かい方があるのです。ある程度は想定して授業に臨みますが、なかなか想定通りにいかないのが道徳科の授業です。

もし、どうにもならなくなったら、皆さんはどうしますか。もちろん、何とか子どもたちが終着駅にたどり着けるように努力をしますが、それでもだめだったら、潔く白旗を揚げて、子どもたちと共に話し合いを楽しみましょう。それが「まとめ」と言わずに「終末」という意味でもあり、その授業で完結するような簡単なものではないということです。授業が終わったら、自らの授業を評価して次の授業に生かしていくことを心がけましょう。

最後はちょっと無責任な回答になってしまいましたが、きっと子どもたちは授業を終えてからも日常生活の中で、自らの道徳性を養っていくはずです。

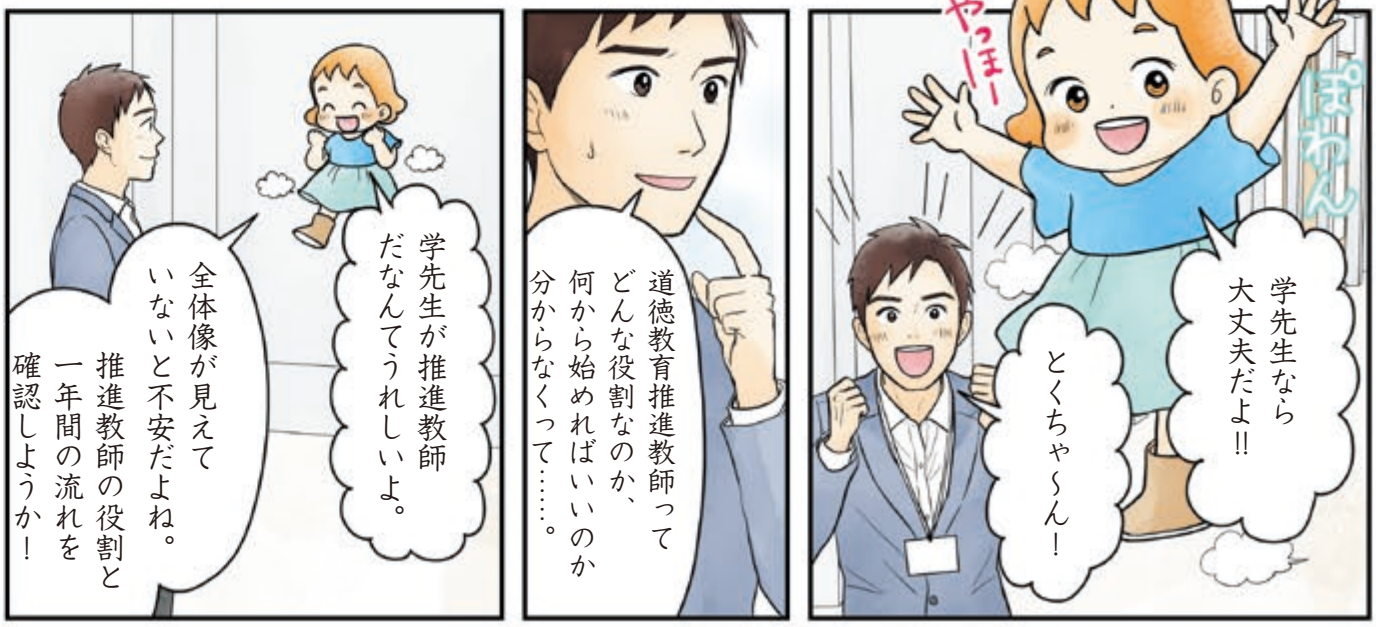
（あさみ　てつや）

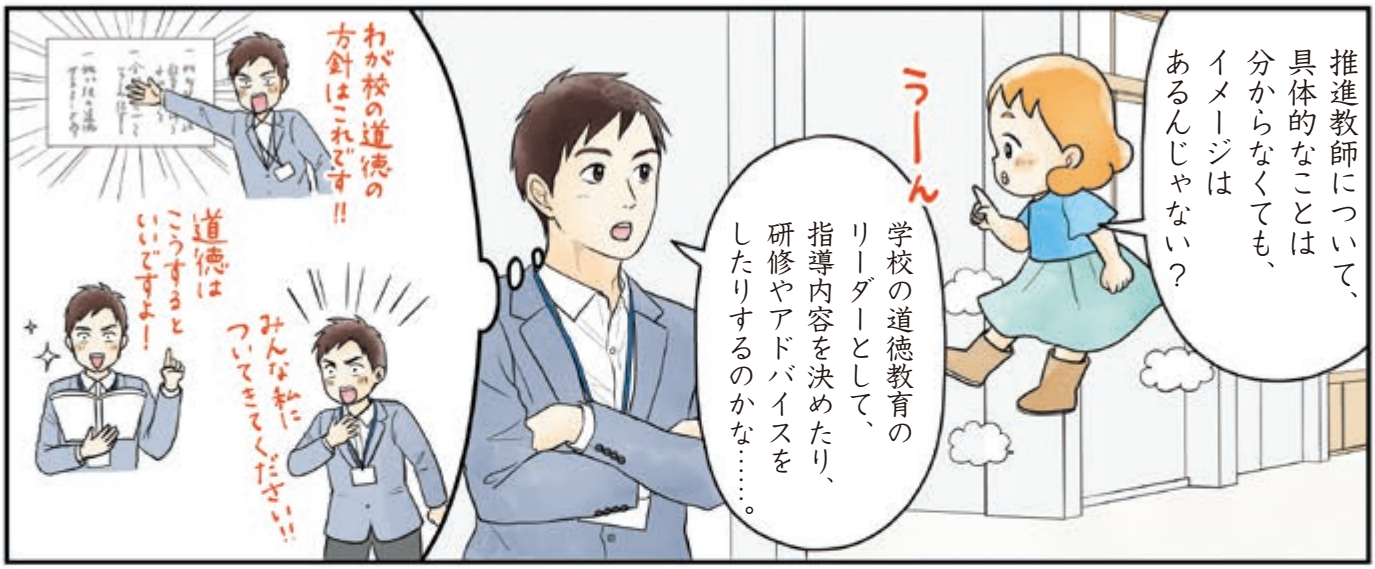
どうなるこれからの道徳授業

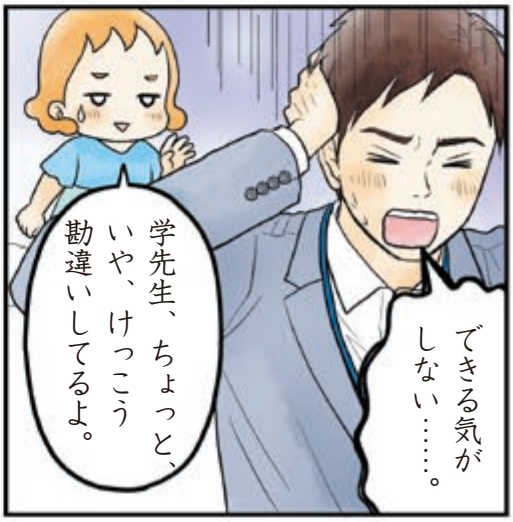
道徳教育推進教師編　その1

監修・廣瀬仁郎　法政大学兼任講師
マンガ・のはらあこ

とくちゃん　学先生

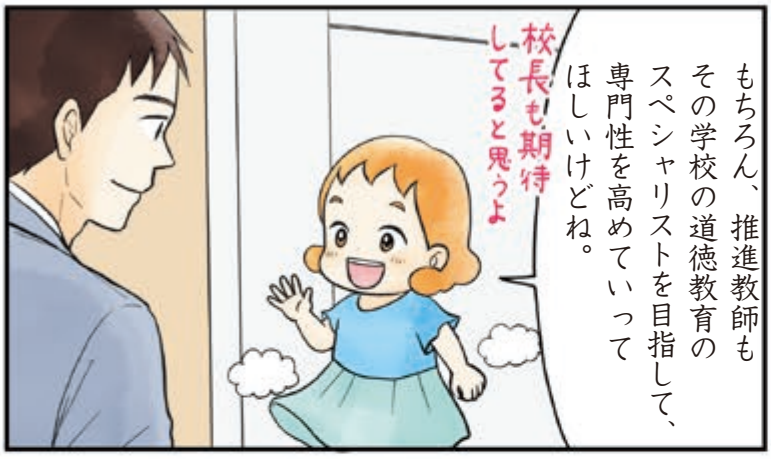


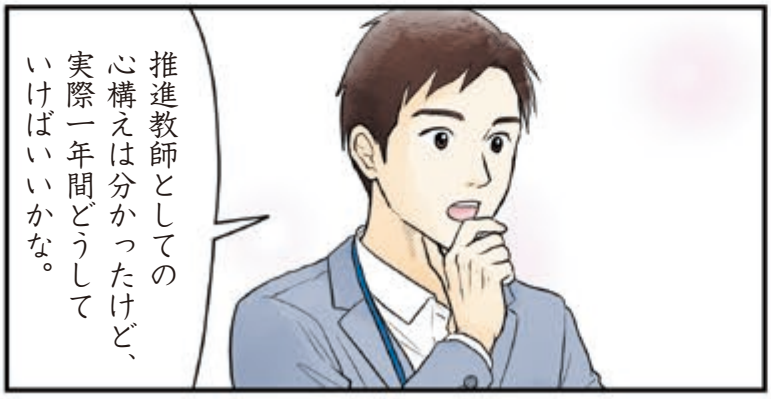

推進教師について、具体的なことは分からなくても、イメージはあるんじゃない？
うーん
学校の道徳教育のリーダーとして、指導内容を決めたり、研修やアドバイスをしたりするのかな……。
わが校の道徳の方針はこれです!!
道徳はこうするといいですよ!
みんな私についてきてください!!


できる気がしない……。
学先生、ちょっと、いや、けっこう勘違いしてるよ。

まず、道徳教育の方針を示すのは校長の役割。
それから、道徳教育を充実させるのは教師全員の務め。
推進教師には、その中心としての役割があるよ。

さっきおやつ買いすぎたから一つ持ってね
それは自分で持ってよ
つまり、全部一人で背負う必要はないってこと。
学校全体で道徳教育を推進する体制をつくることが、推進教師の役割なんだ。
そっか、少しだけ安心したよ。


校長も期待してると思うよ
もちろん、推進教師もその学校の道徳教育のスペシャリストを目指して、専門性を高めていってほしいけどね。


推進教師としての心構えは分かったけど、実際一年間どうしていけばいいかな。

道徳教育推進教師の年間スケジュール

4月
- 学校の道徳教育の方針を確認
- 道徳性に関する子どもの実態の把握（アンケート）
- 道徳教育重点目標の作成
- 道徳教育全体計画の作成
- 道徳教育全体計画の別葉の作成
- 道徳科の年間指導計画の作成
- 年間研修計画の作成

5月～7月
- 保護者、地域住民への道徳教育推進についての説明
- 市町村の道徳研究部会への参加
- 授業で使う場面絵等の資料の共有
- 道徳授業に関する研修の推進
- 通知表作成に向けて共通理解を図る

8月
- 講演会、研修の実施

9月～12月
- 校内授業研究会の実施
- 他地域、他校の研修会への参加、自校の教職員への共有
- 道徳授業の参観日の運営

1月～3月
- 指導要録の「特別の教科　道徳」の記入に向けて共通理解を図る
- 道徳教育に関する学校評価の実施
- 全体計画、年間指導計画の実施に関する評価
- 次年度の準備

道徳ジャーナル125号 令和7年5月発行

発行所　株式会社Gakken　**発行人**　木村昌弘　**編集人**　麻生征宏

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部　〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL（03）6431-1565（編集）　**それ以外のことは**…TEL（03）6431-1151（販売）

「学研 学校教育ネット」　https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/　●『道徳ジャーナル』のPDF版はWEBページから。

9300009615

これからもずっとともに、80周年。Gakken

＊『道徳ジャーナル』読者アンケートにご協力ください＊

よりよい紙面づくりのため、『道徳ジャーナル』へのご意見やご感想、道徳に関する悩みや疑問をお聞かせください。

◀左の QR コードからアンケートにご回答いただけます。